

第十七回 開催報告と謝辞

日本僑報社・日中交流研究所 段躍中

第十七回「中国人の日本語作文コンクール」のポスター



主催 日本僑報社・日中交流研究所

協賛 株式会社パン・パシフィック・インターナショナルホールディングス、公益財団法人東芝国際交流財団

メディアパートナー 朝日新聞社

後援 在中国日本国大使館、(公財)日本中国友好協会、

日本国際貿易促進協会、(二財)日本中国文化交流

協会、日中友好議員連盟、(二財)日中経済協会、

(二社)日中協会、(公財)日中友好会館、日本日中

関係学会、(二社)アジア調査会、中国日本商会、

北京日本倶楽部(順不同)

協力 長沙中日文化交流会館、(公財)日中国際教育交流

協会

開催報告

概要

日本僑報社・日中交流研究所が主催する「中国人の日本語作文コンクール」は、日本と中国の相互理解と文化交流の促進をめざして二〇〇五年にスタートし、今年二〇二一年で第十七回を迎えました。

中国の学校で日本語を学ぶ中国人学生を対象として、この十七年で中国全土の三百校を超える大学や大学院、専門学校などから、五万二千四百八十五名が応募。中国国内でも規模の大きい、知名度の高いコンクールへと成長を遂げています。

この間、刊行し続けてきた受賞作品集シリーズは、中国の若者たちのリアルな生の声であり、貴重な世論として両国の関心が高まっています。今年は『コロナに負けない交流術』をシリーズの第十七巻として刊行いたしました。

応募状況

中国の大学や大学院、専門学校、高校など百六十五校

から三千九十八本もの作品が寄せられたことがわかりました。男女別では男性六百二十四本、女性二千五百七十四本。女性が男性の約四倍に上り、圧倒的多数でした。

地域(行政区)別では、中国のほぼ全土にわたる二十七省市自治区から応募がありました。最多は遼寧省の五百二十本、次いで江蘇省の四百三十二本、浙江省の三百四十七本、広東省の三百一本、天津市の二百三十二本と、日本語学習者が多いとされる中国東北部と沿海部からの応募が上位を占めました。

今回のテーマのコンセプトは、新型コロナウイルスの早期収束を願い、未来志向の日中交流へのヒントを探るために「ポストコロナの日中交流」とし、それに沿ってテーマを(一)私はこう考える！ポストコロナの日中交流、(二)伝えたい！「新しい交流様式」実践レポート、(三)アイデア光る！私の先生の教え方——の三つとしました。テーマ別では、(一)千九百一十一本、(二)六百七十六本、(三)六百一十一本と、(一)が最多となりました。

審査の経過

第一次審査員（五十音順・敬称略）

岩楯嘉之、浦野紘一、古田島宏一、佐藤則次、白井純、
瀬野清水、高橋文行、高柳義美、田中敏裕、寺沢重法、
中山孝蔵、菱田雅晴、丸山由生奈、若林一弘

審査の前に、あらかじめ募集要項の規定文字数に満たない、あるいは超過している作品を審査対象外とした上で、各規定をクリアした作品について採点しました。なお、審査の公平性確保のため、在中国の現任教師は除いています。

第二次審査員（五十音順・敬称略）

赤岡直人（公財）日本中国国際教育交流協会 業務執行

理事

岩楯嘉之 日中青年交流会理事
折原利男 看護専門学校講師、日中友好8・15の会会員
佐藤則次 元日本語教師
白井 純 公益社団法人東芝国際交流財団顧問

最終審査は、二次審査と三次審査の合計点により選出した一等賞以上の候補者計六名の作品を北京の日本大使館あてに送付し、垂秀夫大使ご自身による審査で最優秀賞となる「日本大使賞」を決定していただきました。

各審査員による厳正な審査の結果、最優秀賞・日本大使賞一名、一等賞五名、二等賞十五名、三等賞四十名、佳作賞二百十九名となりました。

また、優秀指導教師賞は八十二名（本書一四四頁）、園丁賞は二十七校（本書一四六頁）となりました。受賞者の皆様、誠におめでとうございます。

作品集について

受賞作品集シリーズは、中国の若者たちのリアルな生の声であり、貴重な世論として両国の関心が高まっています。本シリーズは大変ご好評をいただき、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞、NHK、日本テレビ、テレビ朝日、TBSテレビ、フジテレビ、共同通信、時事通信、産経新聞、東京新聞、西日本新聞、中国新聞、北海道新聞、沖縄タイムス、公明新聞、聖教新聞、しん

関 史江 技術アドバイザー

瀬野清水 元重慶総領事、（二社）日中協会理事長

高橋文行 日本経済大学教授

塚越 誠 書家、日中文化交流の会日本代表

林 千野 双日株式会社海外業務部中国デスクリーダー、
日中関係学会副会長

古谷浩一 朝日新聞論説委員

和田 宏 前NHKグローバルメディアサービス専門委員、
神奈川県日中友好協会会員

第二次審査は、公正を期するために応募者の氏名と大
学名、受付番号を伏せた対象作文を各審査員に採点して
いただく形で実施しました。

第三次審査は、二次審査による合計得点の高かった学
生に対し、スマートフォン音声通話アプリでそれぞれ
直接通話をし、口述審査を行いました（審査員・佐藤則
次氏、段躍中）。その上で、新たに日本語による感想文
を即日提出してもらい、審査基準に加えました。

ぶん赤旗、週刊朝日、サンデー毎日、日経ビジネス、週
刊東洋経済、旅行読売、日中友好新聞、日中文化交流、
日本と中国、国際貿易、観光経済新聞、季刊中国、新文
化、日中新聞、アジア時報、週刊読書人、トーハン週報、
リベラルタイム、ジャパンジャーナル、レコードチャイ
ナなどの日本メディア；在中国日本国大使館HP、また、
公益社団法人日本中国友好協会、公益財団法人日本中国
国際教育交流協会などの団体の機関紙（誌）や会報；新
華社、人民日報、中国新聞社、人民網、チャイナネット、
人民中国などの中国メディアで多数紹介されました。
日本各地の図書館、研究機関などに所蔵されておりま
す。

「コロナに負けない交流術」は、受賞作品集シリーズ
の最新刊です。読者の皆様には、本書を通じて中国の若
者たちの「生の声」に耳を傾け、それによってこれから
の日中関係のあり方のみならず、日本人と中国人の「本
音」の交流についても思いを致していただければ幸いです。

今年も「中国人の日本語作文コンクール」を無事開催することができました。これもひとえに皆様のご支援、ご協力あつてこそで、心より感謝申し上げます。

在中国日本大使館には第一回からご後援をいただいております。第四回からは最優秀賞に当たる「日本大使賞」を設け、歴代大使の宮本雄二、丹羽宇一郎、木寺昌人、横井裕、および現任大使の垂秀夫の各氏にはご多忙の中、直々に大使賞の審査をしていただきました。ここで改めて、歴代大使をはじめ大使館関係者の皆様に、心より御礼を申し上げます。

ご協賛をいただいている株式会社バン・パシフィック・インターナショナルホールディングスのご支援に深く御礼申し上げます。創業会長兼最高顧問、公益財団法人安田奨学財団理事長の安田隆夫氏には、外国人留学生向けの奨学金制度を通して、本コンクールで三等賞以上を受賞した学生に奨学生の選考の機会を与えていただくなど、多大なご支援を賜りました。これは中国で日本語を学ぶ学生たちにとって大きな励みと目標になるもので

す。誠にありがとうございます。

また、マスコミ各社の皆様には、それぞれのメディアを通じて本コンクールの模様や作品集の内容を丁寧にご紹介いただきました。そして日中間交流の重要性や、日中関係の改善と発展のためにも意義深い中国の若者の声を、広く伝えていただきました。改めて御礼を申し上げます。

中国各地で日本語教育に従事されている先生方に対しても、その温かなご支援とご協力で感謝を申し上げます。

各審査員の皆様にも深く感謝を申し上げます。皆様には多大なるご支援とご協力を賜り、改めて厚く御礼申し上げます。

応募者の皆さまにも改めて御礼を申し上げます。そして本コンクールはこの十七年間、先輩から後輩へ脈々と受け継がれてきたおかげで、いまや中国の日本語学習者の中で大きな影響力を持つまでに至りました。歴代の応募者、受賞者ら多くの参加者が現在、日中両国の各分野で活躍されています。皆さんが学生時代に本コンクールに参加して「日本語を勉強してよかった」と思えること、

ここに心より感謝を申し上げます。

公益財団法人東芝国際交流財団からご協賛をいただいております。深く御礼申し上げます。

朝日新聞社には、第七回からご協賛をいただき、第十回からはメディアパートナーとしてご協力いただいております。中村史郎社長や、坂尻信義氏、古谷浩一氏、西村大輔氏、林望氏ら歴代の中国総局長をはじめ記者の皆さんが毎年、表彰式や受賞者について熱心かつ丁寧に取り上げられ、その模様を大きく日本に伝えてくださっています。それは日中関係がぎくしゃくした時期であっても、日本人が中国に対してより客観的に向き合うことのできる一助になったことでしょう。同社のご支援とご協力に心より感謝の意を表します。

第二回から第六回までご支援いただきました日本財団の笹川陽平会長、尾形武寿理事長の本コンクールへのご理解と変わらぬご厚誼にも深く感謝を申し上げます。

谷野作太郎元中国大使、作家の石川好氏、国際交流研究所の大森和夫・弘子ご夫妻、さらにこれまで多大なご協力をいただきながら、ここにお名前を挙げることでできなかった各団体、支援者の皆様にも感謝を申し上げます。

また日本への関心をいっそう深め、日本語専攻・日本語学習への誇りを高めていること——こうした事例を耳にして、主催者として非常にうれしく思っています。

一方、皆さんのように日本語をしっかりと身につけ、日本をよく理解する若者が中国に存在していることは、日本側にとっても大きな財産であるといえるでしょう。皆さんがやがて両国のウィンウィンの関係に大きく寄与するであろうことを期待してやみません。

中国人の日本語作文コンクールは、微力ではありますが、日本と中国の相互理解と交流の促進、ウィンウィン関係の構築、アジアひいては世界の安定と発展に寄与するため、今後もこの歩みをしっかりと進めてまいります。

コロナ禍の困難の中ではありますが、引き続き、ご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

二〇二一年十一月吉日